

労使関係から法を考える



ひろもと 寺井 博
（大学社会学部准教授）

1 雇用社会の紛争処理ルール

日本の就業人口の80%余りは雇用者、つまり会社等に雇用され、働くことの対価として得た賃金によって生活を営む人たちで占められています。その数5154万人。日本はまさに「雇用社会」といえるでしょう。近年、家業を継ぐ若者がますます減ってきていることから、「働く」とは「会社に雇用されて働く」ことを意味するようになってきています。大多数の人が組織に雇用されるようになる多発し、これらの紛争を処理するためのルールが必要になります。その法的ルールである「労働法」が私の研究分野です。労働法とは、労働基準法や労働組合法、男女雇用機会均等法といった法律だけではなく、裁判所によって形成された「判例法理」、会社が作成した「就業規則」や労働組合と会社との合意文書である「労働協約」にも一定の法的効力が与えられていることから、これらすべてを含めた集合体の総称といえます。だから、一般の人には分かりにくいルールかも知

れません。

日本では裁判にかかわることなく一生を過ごす人がほとんどです。仮に職場でトラブルに遭遇したとしても、できるだけ穏便に解決して働き続けたいと思っっている人は少なくありません。実際、多くの企業ではトラブルを表面化せずに、上司が相談に応じるなどインフォーマルな形で問題が処理されるケースが多いようです。ただ、従業員も会社側もこうした法的ルールを知らないためにトラブルが生じることもしばしばあります。紛争の事後処理ルールというよりも、「紛争を事前に回避するための判断基準」という意味で、労働法の知識を広めることが大切だと私は考えています。

2 労使関係の個別化と労働法

労働法の基本的な枠組みを大雑把に捉えると、(a)労働基準法等によって罰則をとらなす労働条件の最低基準を保障し、(b)さらに望ましい労働条件を実現できるように労使の自主的な交渉を促進する、といえます。労使交渉の場面では、労働組合法が労働三権（団結権・

団体交渉権・争議権）を具体的に保障することによって労働者を支援しています。たとえば、労働組合の結成・加入を理由とする差別的取り扱いの禁止、使用者が団体交渉に応じるべき義務、正当なストライキによって生じた損害については賠償責任が免除される等のルールが労働組合法で定められています。なかでも、労使交渉の結果を文書化した「労働協約」は、労働組合法によって労働契約や就業規則に優越する強い法的効力が与えられていることから、労使の自主交渉による労働条件積み上げを具体化する上で大きな役割を果たしています。

しかし、労働協約は、それを締結した労働組合に加入する組合員だけにしか効力が適用されません。現在、労働組合に加入している労働者は全体の20%足らずなので、その適用対象者はきわめて限定的な範囲にとどまります。その僅かな組合員も大企業に集中して、大多数を占める中小企業にはほとんどいません。つまり、ほとんどの職場では労使交渉が機能していないのです。その代わり、会社が作成した「就業規則」によって労働条件

の決定・変更が行われています。ただし、会社にとって都合のよいことばかりを定めないように、労働契約法は、合理的な内容でなければ労働条件とは認められな

いと定めています。このように、労使交渉の機能不全を補うかたちで、就業規則に関するルールが整備され、さらに、労働審判制度や個別紛争処理制度等の導入により、紛争の当事者は労働組合から個々の労働者に変わってきています。とはいえ、労働組合には法令や労働条件が遵守されているかをチェックする機能がなお期待されます。労使関係や就業形態の変化とそれに伴う新たな紛争にどう対処すべきか。労使関係の実相に照らしてその道筋を考えること、それが私の研究です。

3 文科系学生が大学で学ぶこと

文科系学生が修得すべき力は「考える力」や「分析力」だと思います。オーソドックスですが、読む・書く・話す・聞くという基本的な訓練が不可欠です。レポートの作成に際しては、とくに文献の引用方法について指導します。あるテー

マについて多くの著述がある中で、「どこまでその本を選んだのか」、「なぜその部分を引用したのか」をよく考えるように言っています。こうした選別作業こそが分析だからです。文献を何ら評価することなく単に書き写すのはコピー&ペーストです。この違いを認識した上でレポートを書くことによって思考力と分析力が培われると考えています。

また、学期末試験の問題は約3週間前に公表するようにしています。少し骨のある文献を指定して、それを読んだ上で筆者の考えを整理させ、さらに各自の考えを問う形式です。試験までに友だち同士で分からないところを相談し、議論することによって理解を深めてもらうのが目的です。知識の量とその正確さを問うには、出題範囲のみ指定して問題は公表しない方がよいでしょうが、思考力を問うにはこうした方法がよいと考えます。

人が燃え尽きる時 —バーンアウトとは—



まこと
久保 真人
(大学政策学部教授)

バーンアウトとは

「教員、ヘルパー、看護師など、人にサービスを提供することを職務としている人のあいだで、今まで、普通に仕事をしていた人が、急に、あたかも「燃え尽きたように」意欲を失い、休職、ついには離職してしまう例が多数報告されています。彼らが、最初から意欲の乏しい「怠け者」であつたならば、事態はそう複雑ではなかつたでしょう。しかし、それ以前は、精力的に仕事をこなし、まわりの人たちからも一目置かれる存在であつたなど、その前後の落差が大きいだけに、同僚や上司も、まさに「燃え尽きた」としか言いようもなく、ただ驚くばかりです。

身体への消耗に比べ見逃されがちですが、私たちの心も消耗しています。教員、ヘルパー、看護師などの現場では、サービスをやり取りする関係のなかで、相手の気持ちや思いやり、その振舞いを受け入れ、私的な問題にまで分け入って問題を解決していくことが求められる場合が少なくありません。相手への共感性が高く、誠実な人ほど、関係に巻き込まれ、気づかないうちにな心のエネルギーが奪われていきます。「心が酷使」され、消耗が繰り返

り返されると、やがて心のエネルギーは枯渇してしまいます。こうなると、喜び、怒り、そして感動など、感情経験そのものを失ってしまいます。これが、バーンアウトと呼ばれる症状です。

燃え尽きない人

では、良質なサービスを提供し続けている人は、必ずバーンアウトに陥るのでしょうか。いろいろな文献を読んでいく中で「突き放した関心 (detached concern)」という言葉にいきあたりました。文献の中では「相手に共感しながら、一定の距離を取る」、燃え尽きることなく高いレベルのサービスを維持するため、ヒューマン・サービスマンが身につけるべき技能と説明されました。しかし、一読した時は、具体的にどのような状態、技能のことを言っているのか、まったくイメージがわかりません、特に気にもとめず、言葉さえ忘れかけていました。

この言葉について再び考えるきっかけとなつたのが、ある看護師長さんに、スタッフのサポートで心がけていることについてたずねたときです。彼女は、即座に、スタッフが担当していた患者さんが亡くなつたときのことを話してくれまし

た。患者さんが亡くなつたときに、必ず担当のスタッフに声をかけるようにしているとのことでした。当時、この看護師長さんが担当していたのは血液のがんの治療を受けている患者さんが入院している病棟でした。疾病の性質上、治療の及ぶ限界のため、病院で亡くなる患者さんも少なくありません。特に、血液がんの患者さんの中には、まだ若い人も少なくないそうです。ケアしていた患者さんが亡くなつたとき、とりわけ、人生の入り口でこの世を去つていかざるをえなかつた患者さんに対しては、耐え難い不条理とともに、もつとあげられることがあつたのではないかという思いが繰り返しわき起こつてくるそうです。そのようなときに、このスタッフに「精一杯よいケアをしてあげていた」ということを伝え、回復して退院していく患者さんにも不幸にして回復することなく亡くなつてしまった患者さんにも、最後の瞬間までよいケアができていれば、そのことに、看護師は、同じだけ達成感を感じてよいという話をしてあげるとのことでした。そうすることで、ともすれば際限のないループに陥つてしまう感情を「切つて」あげることができるといふのです。

この看護師長さんの話を聞いたとき、

先の「突き放した関心」という言葉のイメージが「すつと」私の中に入つてきました。相手の状態、気持ちに共感しながらも、その感情がとめどなく増幅してしまふことを「突き放す」専門家として、冷徹な判断力を持ち合わせていること、言い換えれば、最善のケアをしてあげたいという気持ちと「最善」の限界を了解し、自身の感情をマネジメントすること、これが「突き放した関心」のひとつのイメージに違いありません。まさに、私の中で、この難解な言葉が「腑に落ちた」瞬間でした。

バーンアウトを防ぐためには

この「突き放した関心」が、ヒューマン・サービスマンとしての相手を思いやる心、生き活きたとした感情経験を保つための技能であるとすれば、この種の感情マネジメントを研修の中に取り入れることは、バーンアウトを防ぐ有効な手段となるでしょう。

ここまで、サービスマンの提供を職務とする人たちを想定して書き進めてきましたが、人とのやりとりの中で心のエネルギーが消耗していくという過程は、何もこれらの仕事に限つたことではありません。生活の様々な側面が機械化され、身体へ

の負荷が少なくなつてきている現代社会では、心のほうがはるかに激しい消耗のサイクルにさらされると言えるでしょう。日々の暮らしを見ても、子育てや介護など、さまざまなことに心のエネルギーが費やされています。人との関係の中で消耗し、燃え尽きていくのは、人との関係を大切にすやさしい心が備わっているからです。しかし、相手を思いやる心だけで、深く人に関わっていくことの危うさを知っておくことは、自らの消耗を防ぐためにも、また相手への気持ちが高回りしないためにも大切なことだと

言えるでしょう。



久保真人編著
『感情マネジメントと癒しの心理学』
朝倉書店



久保真人著
『バーンアウトの心理学』
サイエンス社

自治体の活用した観光産業と地方財政破綻に関する研究



しひろ 津田 博史
(大学理工学部教授)

はじめに

2009年10月発行の同志社時報の「私の研究・私の授業」において私の研究を一度紹介しておりますが、現在も引き続き統計数理的な解析方法を駆使して将来発生することを予測し、リスクコントロールを行うといったリスクマネジメントの研究をしています。今回は、ここ最近、新たに取り組み始めましたWebデータを活用した観光産業に関する研究と地方自治体の財政破綻に関する信用リスクの研究をご紹介します。

観光産業は、日本の主要産業の一つですが、平成18年度に旅行消費額が30兆円に至ったものの、平成22年度は、約24兆円へと低下しました。そのため、日本政府は、観光産業の活性化を図るため「平成28年度までに国内における旅行消費額を30兆円に拡大する。」という観光立国推進計画を平成24年3月30日に発表しました。昨年、ネット社会が急速に広がる中、Cyber worldを利用したビジネスが急速に拡大してきており、観光産業においても例外ではありません。ここ最近では、各旅行会社が企画・運営している旅

行プランに満足できず、旅行会社に企画してもらおうのではなく、自分で旅行プランを立てる人の数が増加してきています。このような人々は個人旅行者と呼ばれ、個人旅行者の多くはインターネットを利用して宿泊場所や宿泊プランの予約を行うつつあります。今後のIT産業の発展も考慮に入れますと、このようにインターネットを通して宿泊予約をする人の数が増加することが予想されます。こうした背景から、地域振興の観光政策を立案する際に、事前に観光施策の経済波及効果を予測し、その実際の効果を確認するために、個人旅行者が地域観光産業にどのように影響を与えているのかを把握することが必要不可欠です。

京都市内の宿泊施設に関する研究

Webデータを活用した観光産業に関する研究は、京都市と国立情報学研究所と意見交換しながら共同で行っています。京都市は世界的に有名な観光都市であり、国内の観光客だけでなく海外からも多くの観光客が京都市を訪れることから、観光立国推進計画を日本が進めていくうえでメルクマールとして重要です。京都市

も観光産業を重要な産業と位置付けており、管轄地域に経済波及効果を及ぼす観光政策の立案、施行を行っています。こうした理由から、研究目的の一つ目として、京都市の観光政策の経済波及効果を捉えるために、地域観光産業の代表として宿泊施設を分析対象とし、Webデータに基づき京都市内の宿泊施設の客室稼働率に関して、宿泊施設の立地条件、規模やタイプなどの区分毎に日次で推定することとしました。二つ目の目的として、京都市がより効果的な観光政策が施行できるように京都市に訪れる観光客がどのような基準で宿泊施設を選択しているかすなわち、消費者の宿泊施設の選択行動の要因を解明することとしました。

地方自治体の信用リスク

新たに取り組み始めた二つ目の研究テーマは、地方自治体の財政破綻に関する信用リスク評価です。ここ最近、円安と株価上昇により、景気が回復しつつありますが、2008年のリーマンショック以降、我が国では企業倒産が著しく増加しており、景気低迷の長期化により多くの自治体では地方税収が低迷してきまし

た。また、地方交付税に関しても国から必ずしも必要な額が交付されてこなかったため、各自治体は必要な資金を地方債の発行により賄ってきており、地方公共団体は、地方債を中心に平成24年度で約200兆円の巨額の負債を抱えています。なお、日本の地方財政制度では、様々な制度を通じて地方債がデフォルトするとは無いとされていますが、債務に関する支払いが期日通りに執行されること保証されていないことから、信用リスクが反映した形で市場価格が形成されていると考えられます。地方債には、一般会計債や公営企業債などがあります。一般会計債は、元利償還金が地方税、地方交付税などの一般財源を中心とする一般会計の歳入から支払われます。地方交付税は、地方債の償還財源までも手当てしており、地方債は法的な債務保証はないが債務不履行はないとされています。一方、公営企業債は、その元利償還金が地方公営企業の収入から支払われ、独立採算が原則とされています。こうした背景から地方債は、国による「暗黙の保証」がされていると従来認識されてきました。しかしながら、日本の国債の発行残高が1

000兆円にも達する状況から、ソブリニリティが指摘されはじめている今日、企業での親会社と小会社との関係と同様に、地方自治体が国に依存している状況においては、今後、国の財政が厳しくなるにつれ、地方自治体の財政破綻へのシステミックリスクが高まる懸念が懸念されます。

おわりに

今回は、Webデータを活用した観光産業と地方自治体の財政破綻に関する信用リスクの研究について紹介しましたが、地方自治体にとり、地域経済の活性化は財政破綻を回避するために必要不可欠であり、その切り札として観光産業が期待されています。今後、Webデータ等のビッグデータと統計数理的な解析方法を用いて、日本の地方や地域の政策の意思決定に貢献できればと考えています。

新しい歴史像の模索へ

おがわら ひろゆき
小川原 宏幸

(大学グローバル地域文化学部助教)

京都コリア学コンソーシアム活動の一環として

盆地のなかに数多くの大学が建ち並ぶという地理的特徴もあり、同志社大学をはじめとした京都の各大学で、朝鮮半島に関わる研究・教育（以下、コリア学と呼ぶ）関係者が数多く活動している。京都では研究者や学生らの相互交流が頻繁だが、コリア学関連の研究者や学生らはいだでも、研究・教育・国際交流などさまざまな面から活発な交流や協力関係が築かれてきた。こうした京都の地の利を生かしながら既存のインフォーマルなネットワークをコンソーシアムとして組織化し、その相乗効果によってコリア学の研究・教育・国際交流をいっそう活性化させるとともに次世代研究者の育成を図るべく2012年4月に設立されたのが京都コリア学コンソーシアム（略称CKCS）である。発足以来、毎月行われる定例研究会や各種シンポジウムなど、地道に活動の幅を広げてきたが、こうした活動実践の場を広く教育プログラムとして展開するため、今年度は、本学部を設置されている「国際教養基礎論―朝鮮半島の歴史（近代）」を大学コンソーシアム京都の単位互換科目としてコリア学に関心をもつ京都の学生に広く開放した。

そしてCKCSの共同授業として、加盟する同志社大学、京都大学、立命館大学、佛教大学の教員により、リレー方式で講義を行った。概説的に通史を押さえた上で、近代朝鮮史という共通の枠組みを各教員の個性を織り交ぜながらさまざまな切り口で論ずる授業を通じ、朝鮮史の奥深さを学生に示すことができたように思う。事前の宣伝不足もあつてか、今年度の他大学からの受講生はあまり多くなかったが、朝鮮半島に興味をもつ学生が気軽にコリア学の最前線に触れることができるよう、こうした教育活動を今後も続けていく予定である。大学の枠にとらわれないこのような学際的な試みから次代を担う人材が生まれることを願っている。

近代における歴史研究の問題

私の専門は歴史学である。大学時代は日本史研究室で歴史研究の手ほどきを受けたが、日本帝国主義史研究を始めなかで関心を朝鮮半島に移し、以来、主に1910年の韓国併合を前後する時期の日本の朝鮮植民地化過程を中心に日朝関係史研究を続けてきた。そのなかで否応なく気づかされたのが、日本の西欧中心な歴史認識と、それにもとづいて再生産される朝鮮認識が抜きがたくわれわれを拘束していることであつた。そしてそ

れは、日本における歴史認識の問題とも密接不可分に結びついている。

よく知られてるように、価値中立的に見える学知もまた、自分たちが生きている体制を維持・再生産する諸制度の一環であるという側面をもっている。近年、近代国民国家という国際システムにさまざまな形で疑念が投げかけられているが、その一方で、依然として、競争や生産力の向上、発展といった「近代」的価値観に対して根本的な批判の目が向けられることは少ないように思われる。3・11以降の悲惨な原発事故に直面してもなお、観が歴史上どのように形成されてきたのかという問いを主要な課題として設定してきたが、そうした眼差しは、意識するとしなやかにかわらず、「近代」的価値観に適合しないものを否定的にとらえてしまう姿勢につながる。モダニズムのドグマゆえに、本来豊かなはずの人間の歴史的経験を正面からとらえられず、陳腐なものとして理解してしまったという側面は否定できないであろう。特に「近代」化という名の「西欧化」（＝脱亜）を150年にわたって自らの課題としてきた近代日本にあつては、「近代」という特殊な時代経験をあたかも普遍的趨勢としてとらえてきたように思う。そうし

た認識的枠組みにおいて、日本との文化的「共通」性ゆえに、近代日本の格好の陰面として朝鮮は位置づけられ、その独自の研究領域が与えられることはほとんどなかった。朝鮮史像をどのように描くかという課題は、日本社会をどのように認識するかというアクチュアルな問いかけと表裏一体の関係にある。

グローバル化社会における歴史学の役割

国民国家への疑問が呈されるようになったのは、近年のグローバリゼーションの進行もその一因であろう。近代歴史学は国民国家単位で歴史的経験を分析・認識してきたが、しかし振り返って考えてみると、世界システム論が明らかにするように、16世紀以降、「世界史」は一貫してグローバリゼーションの下で展開してきた。やや誇張した言い方になるが、近代においては、世界史の実態はグローバリゼーション下にあり続けたのである。にもかかわらず、われわれは世界史を各国民国家の展開という歴史像で把握してきた。それゆえ、グローバル社会に生きる人々の多様な生の営みは、国民国家を主語とする国際関係の一要素としてしか把握されないことになり、国民国家を形成できない社会集団はそれこそ「歴史な

き民」として位置づけられることとなつた。

現在否応なく進むグローバル化の趨勢がもはや抗しがたいものだとすれば、われわれ歴史研究者に求められるのは、グローバル化社会に対応した歴史像をあらためて提示することである。その際私は、現在隆盛になっているグローバル・ヒストリーの動向ではなく、地域社会を規定する政治文化を動的に把握しながら、そうした地域文化のあり方がグローバル社会をどのように規定していくのかという観点から、右の課題にこたえていきたい。グローバリゼーションの進展過程で再編成されている構造的暴力のもと、世界の至るところで人々の生が脅かされ続けている現在、権力の重層関係のなかでその生を脅かされた人々の歴史的経験を再構成しながら、暴力に対する批判的論理を抽出することに歴史学の現在の課題があると考えるからである。「グローバル」と「地域文化」がきりむすぶ場に自らを置きながら、新たな歴史像を構想するというのが、本年度開設されたグローバル地域文化学部教員である私にとっての課題である。

骨粗鬆症と酸性環境を作り出すナノマシン



和田 戈虹 (女子大学薬学部教授)

骨粗鬆症と破骨細胞

骨粗鬆症(そしょう)症の「粗」は「荒い」、「鬆」は「松の葉の重なりから向こうがすけて見えるさま」、「スが入る」という意味です。すなわち、骨粗鬆症とは文字通り、骨の量が減って骨強度が弱くなり、骨折しやすくなる病気です。英語ではオステオポロシス(Osteoporosis)といい、骨に孔がたくさん空いているという意味です。骨粗鬆症は人類の歴史とともに古くからありました。4000年前のエジプト王朝のミイラに、骨粗鬆症による骨折が見つかっています。近年寿命が延び、高齢者人口が増えています。そのため、骨粗鬆症が特に問題になってきています。日本骨代謝学会の「骨粗鬆症の予防と治療ガイドライン」によると、日本では、骨粗鬆症患者が1300万人と推測されています。大腿骨頸部骨折は高齢化社会が進むに従って急速に増加しています。

骨粗鬆症の原因は、骨の形成・維持に関わる細胞の活性のバランスによるものです。骨をつくる作業は「骨芽細胞」が行っています。一方、古くなった骨を壊す作業を「破骨細胞」とよばれる細胞が行っています。このような骨の破壊と再

生を、骨のリモデリングといい、一つの周期に3ヶ月程度を必要とします。破骨細胞と骨芽細胞の活性がバランスよく保たれている時には、何の異常も見られませんが、いろいろな原因でこのバランスに変移が起こると骨の病気が起こってきます。特に、加齢とともに破骨細胞が形成する「酸性環境」による骨吸収の亢進が骨密度減少の主な原因であると考えられています。

生体内の酸性環境

私たちの体の様々な組織に酸性のpHを示す環境(コンパートメント)が存在し、重要な働きをしています。このようなコンパートメントとして、まず思い浮かぶのは、胃内腔です。また、尿管、膀胱、輸精管などの内部も酸性です。これらの組織のpHは消化、イオン恒常性、精子の成熟などに欠くことができません。細胞の中にも、pH4.5〜pH5.5の内部酸性の細胞内小器官が存在します。破骨細胞が形成している骨吸収窩(resorption lacuna)も、酸性pHを示すコンパートメントの一つです。胃内腔の酸性pHは、胃粘膜に存在する壁細胞のH⁺/K⁺ ATPase-JHばれる酵素が形成していますが、酸性コンパートメントの多くはV型ATPase (vacuolar-

type proton ATPase) が形成しています。

V型ATPaseは、図Aで示すように、膜内部に存在するV₀部分と膜表面に存在するV₁部分からなる複数のサブユニットをもつ酵素複合体です。この酵素は、ATP加水分解から得られたエネルギーを利用して、膜を介して水素イオンを一方方向に輸送し、様々な細胞内・細胞外の酸性環境を形成します。骨組織に局在する破骨細胞が骨との間に形成する酸性コンパートメントである骨吸収窩は、骨組織のリソカルシウムなど無機質の可溶化とカテプシンKやコラゲナーゼなどの酵素活性に重要な役割を果たしていますが、その酸性化は、破骨細胞の形質膜に局在するV型ATPaseが関与しています(図B)。筆者の研究室で破骨細胞V型ATPaseの遺伝子欠損マウスを作出しています。変異マウスは破骨細胞の機能欠損により、骨密度が異常に高い、ヒトの骨代謝異常の遺伝病である「大理石病」の症状を示します。最近、阪大の研究グループとの共同研究で、破骨細胞が骨を壊す様子を可視化することに世界で初めて成功しました。破骨細胞には、実際に骨を壊しているもの(R型)と、今は壊していないもの(N型)の2種類が存在することが分かりました。これまでビス

ホスホネート製剤を始めとして、行き過ぎた破骨細胞の働きを抑えるために、「破骨細胞を殺す(=数を減らす)」薬剤が主に使用されてきました。しかし、破骨細胞を減らしすぎると骨の修復ができなくなり、逆に骨が脆くなってしまうことが大きな問題となっています。今後、破骨細胞の絶対数を減らすのではなく、R型を減らして、逆にN型を増やすような新薬の開発が期待されます。

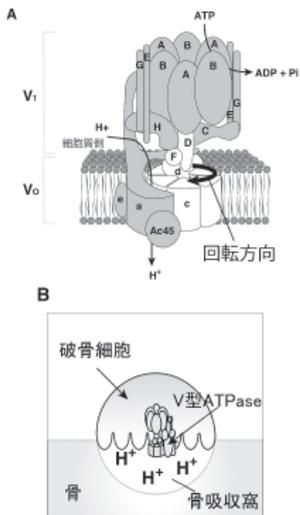
V型ATPase: 回転酵素のナノマシン

V型ATPaseは図Aに示すように、V型ATPaseは、ATPを加水分解する触媒部分(V₁)とプロトン輸送する部分(V₀)からなっており、触媒活性とプロトンの輸送はサブユニット間の相対的な回転により共役しています。酵素全体はモーター、車軸、車輪などのようなパーツからなる装置で、分子機械といえる複雑で精緻な構造を有しています。ATPの加水分解の際に生じるエネルギーを利用して、車輪を回転させ、水素イオンを輸送します。最近、V型ATPaseのX線結晶構造も明らかにされ、今後、酵素の立体構造を基に破骨細胞特

異的なV型ATPaseの阻害剤の開発も、骨粗鬆症の治療に役立つものと期待されます。

文献

- 1 動物細胞の外に多様な酸性コンパートメントを形成するプロトンポンプ: リソソームから骨吸収窩、アクロソームまで。細胞工学生21巻: 222-229 (2002)
- 2 Optic Nerve Compression and Retinal Degeneration in Tcrg1 Mutant Mice Lacking the Vacuolar-Type H-ATPase $\alpha 3$ Subunit. *PLoS One* 15巻(9): e12086 (2010)
- 3 Dynamic visualization of RANKL and TNF- α mediated functional control of multinucleated osteoclast function in vivo. *Journal of Clinical Investigation* 123, 866-873 (2013)





たかかず
藤原 享和
(中学校・高等学校教諭)

上代歌謡・ やまとことばのうた

上代歌謡とは

『同志社時報』第102号(1996年10月発行)の「私の研究」欄に「古事記」に見える「大御葬歌」という拙稿を掲載して頂いてから、早くも17年が経過しました。勉強は遅々として進みませんが、上代歌謡の魅力は私の心をとらえ続けております。

私が主に研究をしております「上代歌謡」とはどのようなものかと申しますと、『古事記』や『日本書紀』、『続日本紀』等に記載されております奈良時代及びそれ以前に発生した「節をつけて歌われた歌」のことで、その多くは作者を特定することができません。

同じく奈良時代中頃までの歌が集められた『萬葉集』には実に4500首以上の歌が掲載されておりますが、『古事記』や『日本書紀』にはそれぞれ100余首の歌しか載せられておりませんし、『続日本紀』に至っては僅かに8首の歌を記載しているに過ぎません。

『萬葉集』の多くの歌のように作者が存在(未詳のものも含めて)する五・七調を基調とする歌は「和歌」と呼ばれ、

自然発生的な「歌謡」とは講学上はつきりと区別されています。「上代の歌」と聞いて多くの人が思い起こすのは『萬葉集』であることは言うまでもありませんが、私は比較的素性のはつきりした『萬葉集』の歌よりも、謎の部分の多い「上代歌謡」に魅力を感じます。

よみがえる上代の響き

『日本書紀』、『続日本紀』の地の文は漢文体であり中国語の文法構造で記されていますが、歌謡の部分の多くは一字一音式の万葉仮名表記が採られています。『古事記』は倭文体(従来は「変体漢文」と呼ばれていました)が、近年は毛利正守氏がこの呼称を提唱しておられます)で記されていますが、撰録後あまり読まれなかつたためか、撰録者太安万侶が読み方の注までつけてくれているのに地の文は未だに読みが確定していないところが多いのです。江戸時代の後半になって本居宣長が『古事記伝』を著し、それによって全文の読みが一応提示され、その後の研究の進展によって徐々に修正・補完されつつあるものの、未だに読み方のわからぬ部分もあるのです。試しに近年に

世に出た手許の二、三の注釈書を見てみますと、『古事記 上巻』本文冒頭部の「天地初発之時……」という部分を倉野憲司校注『日本古典文学大系1 古事記祝詞』では「あめつちはじめてひらけしとき……」としておりますが、西宮一民校注『新潮日本古典集成 古事記』では「あめつちはじめておこりしときに……」、神野志隆光・山口佳紀校注『新編日本古典文学全集1 古事記』では「あめつちはじめてあらはれしときに……」となっております。

太安万侶がやまとことばを伝えるのに苦心した『古事記』も、このように撰録後1300年を経た現在では正確に読むことすら出来ないのですが、『古事記』の中でも「歌謡」の部分は一字一音式の万葉仮名表記が採られているため、ほぼ正確に上代の読みのまま享受することが出来るのです。私が上代歌謡に大きな魅力を感じるのはい、すなわち上代の口吻そのままに正確なやまとことばで読むことが出来るという点です。

一例をあげてみますと、
「夜麻登波 久爾能麻本呂婆 多々那豆
久 阿袁加岐 夜麻暮母礼流 夜麻登志

宇流波斯

これは 「やまとは くにのまほろば たたなづく あをかき やまごもれる やまとしうるはし」と読みます。東征の試練を経てようやく尾張の美夜受比売と結婚するやすぐに伊吹山の神に敗れて死んでいかねばならなかった倭建命が故郷のやまとへあと一歩というところ(能煩野―現在の三重県亀山市)で歌った望郷の歌です。是非ゆつくりと発音してみてもいい。

やまとことばの享受

言うまでもなく文学の享受というものはストーリーの理解にとどまるべきではありません。太安万侶は、日本語とは発音や意味の切り分けを全く異にする中国語を書き表すための文字、つまり漢字でやまとことばを表現する苦勞を乗り越えて、私達にやまとことばによる歴史・文学を残してくれました。耳にすることは響き、発音したときの心の震え、そういったものが私達の心を揺り立たせるのです。翻訳文学ならば到底無理なことですが、私達は私達の古典をその時代の発

音になるべく近いことばで読むことで真にその古典を味わうことが出来るのです。もつとも「研究」という以上は、「うつくしいなあ」と感動しているだけでは何も進みませんし、それが論理的思考の妨げになる場面さえあります。むしろ極力主観を排して、冷徹に作品そのものの位置づけを考究していかねばならないのですが、学会発表の準備や論文の作成で論理的部分をフル回転させているときでも、一方にはことばの響きによって心を揺さぶられる気持ちを忘れることのないよう意識していくべきと心がけております。文学作品は研究素材としてこの世に現れたのではないのですから。

今回は主にことばに心震わせる「情」の部分について述べましたが、「知(論理)」の部分につきましては拙著『古代宮廷儀礼と歌謡』(2007年、おうふう)同志社大学今出川図書館、同志社女子大学今出川図書館、同志社高等学校図書館蔵)にお目通し賜れば幸甚でございます。同書は『同志社時報』第127号(2009年4月発行)に内藤英人氏による書評を掲載いただいております。